

流れる雲とか瞬く星とか

(BGM：月見桜)

8月下旬。

夕食後。リビングでルナ様に紅茶をサーブしていると、遠く窓の外からドン、ドンという音が間断なく聞こえ始めた。

「花火、始まったみたいですね」

「そのようだな。きっとユーシエたちも今ごろ楽しんでることだろう」
本日は近隣で花火大会があるとのこと、お屋敷のお嬢様方はみんな揃ってお出かけ中だ。

ただ一人、僕の主人を除いて。

「しかし、どうしてみんなわざわざ人の集まるお祭り騒ぎに出かけたがるのか、私には全く理解不能だ。花火を見るだけならどこか近くのホテルの最上階でも借りて、そこからゆっくりと楽しめばいいじゃないか」

「確かにそれも素敵ですけど、にぎやかなお祭りの中で見上げる花火にこそ日本の情緒が感じられるでしょう」

「暑苦しい人混みに情緒も何もないだろ」

GWやプールのときと同じく、ルナ様は今回もほかのお嬢様方との外出をお断りになっている。理由は「衣装製作で手が放せないから」。この間までは「デザイン画を描きたいから」だったのが、ショー用の衣装製作が縫製に入ってからはこちらがルナ様の防御壁になっている。

もちろん忙しいのは事実なので全部が嘘というわけではないけど、花火も見に行けないというほどじゃない。実際、ほかのお嬢様方はお出かけになっているわけだし。

だからこれもいつものことで、自分が同行できないことに変に氣を使わせないようにするための方便だろう。

ルナ様はその身体上の理由から人前に出るのを嫌っているから、人が多く集まるお祭りなんて行きたがらなくて当然だし。

お嬢様方もこれまでの経験でそれは十分承知されていたから、付きあいが悪いことを責めることもなく、多少は残念そうにしながらも自分たちだけで楽しんでくると言ってお出かけにいられた。

そこまでは今まで通りだ。

でも一つ、今までとは違うところがある。

それは僕がいまルナ様の側に残らせてもらえているということ。し

かも前みたいに僕が意地を張ったからじゃなく、ルナ様自ら僕に側にいるよう命じてくれた。

——あの日。一緒に浴室で水遊びをした日に約束してくれた言葉。

『その代わり、私も自分が一人になりそうな時は、他の者に同行を命じて、君を屋敷へ残すようにする』

その言葉の通り、ルナ様は僕を自分の側に残してくれた。お嬢様方の付き添いにはサーシャさんたち従者の皆さんと、八千代さんが学生の監督責任者として同行してくれている。

だからいつもより人気のないお屋敷の中は、とても静かで。花火の音が遠くから聞こえてくるだけで。

こんな雰囲気の中にルナ様を一人にせずにできたことに僕はすごくほっとしていた。

「ルナ様、紅茶のお代わりはいかがですか？」

「……………」

「ルナ様？」

「あ、ああ、少しぼーっとしてしまっていた」

「大丈夫でしょうか？ 今日はお部屋で一日中作業されていたようですし、お疲れになっているのではありませんか」

「君ほどじゃない。適度に休憩も取っているから心配しなくてもいい」

「そうでしょうか」

ルナ様はそう言うけれど、僕は心配になった。

体調のこともそうだけど、もしかして僕はルナ様の寂しさを紛らわせることができていないんじゃないか。

そんな不安が心をよぎった。

確かに僕はルナ様を一人きりにしたくなって、いま側に居させてもらっている。

でもそれはあくまで僕の希望をルナ様が聞き届けてくれただけにすぎない。

ルナ様は僕が側にいたいという気持ちを嬉しいと言ってはくれたけど、それで寂しさが紛れるかどうかは別の問題だ。

現にいまもお屋敷の中は静かで、ここからでは見えない遠いはずの花火の音もやけに大きく届いてくる。

「また変な気遣いをしているんじゃないだろうな？」

「えっ？」

そんなことを考えていたら、今度は僕の方が黙り込んでしまった。ルナ様がいぶかしげな目でこちらを見上げている。

「どうせ君は、また私に要らぬ気遣いをしているんだろう？」

…………どうしよう。できれば正直に打ち明けたいけど、面と向かって「寂しくはありませんか」なんて尋ねたら気分を悪くさせるのは目に見えている。

ルナ様がお出かけにならなかった理由はあくまで衣装製作のためであって、それ以外の理由はないことになっているのだから。それは気

遣いじゃなくて、主人に対する侮辱だ。

「そんなことはありません。……音に聞く花火も良いものだなと、少し感じ入ってしまった」

だから、僕はなんとかごまかすことにした。不安は残るけど、それを晴らすためだけに主人を不快にさせるのはいけないことだとGWに学んだから。

「……そうか」

それに対してルナ様の返事はひどく素っ気のないものだった。

我ながら下手な嘘だという自覚はあったので、もっと追求されるかと思っただけ……。

そのままルナ様は黙ってしまって、僕としても藪蛇になるのは避けなかったのもそのまま口を閉じた。

何か気を逸らすのにいい話題はないかなあ。

会話が途切れると花火の音が余計に寂しげに聞こえる。

「——ところで朝日」

「はいっ！」

最初に沈黙を破ったのはルナ様の方だった。とつくに空になってしまったカップをつかみながら横目で僕の方を覗っている。

「いや、さっきから気になっていたことなんだが……」

「何でしょうか？」

「……何故、君は浴衣を着ているんだ？ しかもエプロン付き」

「えっ？」

指摘されて改めて僕は自信の姿を確認した。

確かにいま着ているのはいつものメイド服ではなく、浴衣だ。当然、女物。ちゃんと髪まで結い上げているし、何故かオプシヨンでエプロンまでついている。

「あの、これは瑞穂様から頼まれたのですが……何も言われないのでルナ様はてっきり事情をご存じのこととばかり」

「瑞穂に？ いや、全く。聞いてない」

いぶかしげな視線を向けてくるルナ様。おそらく今日は一日部屋に籠もっていて、出てこられたのはお嬢様方が出かけになられた後だったから、誰からも事情を聞かされていなかったのだろう。

今日いろんなところで説明して回っていたから、僕としてはもうルナ様にも知られてるんだと思いこんでいた。食事の時もなにも言われなかったし。

でも、だったらちようどいい。ちようど話題にも困っていたことだし、今朝のドタバタを話せばきつと気分も紛れるんじゃないかな。

そう思って、僕は今朝あった出来事を今日何度目かのようにルナ様へと話し始めた。

(BGM…あまりに乙女的なサロン)

「朝日」

アトリエに向かおうとしていたら、瑞穂様と呼び止められた。

「瑞穂様。何かご用ですか？」

「うん……さっきルナから聞いたんだけど、朝日は今夜の花火大会に同行しないって本当？」

「あ、はい。今回はルナ様のお世話のため、お屋敷に残ることになりました」

僕がそう応えると、瑞穂様の表情が目に見えて暗くなってしまった。どうしよう、後ろめたいことは何もないはずなのに、何だかすごく悪いことをしてしまった気がする。

「そんな……久しぶりに朝日と遊びに行けると思って楽しみにしていたのに」

最近はずっとアトリエにこもって衣装制作してたから、瑞穂様とお話する時間も中々とれてなかったし。きっと今夜のことを楽しみにしてくれてたんだろうな。

ルナ様を一人にはしたくないから、どうしようもないんだけど。そ

れは僕の我儘だから、それで瑞穂様にごっかりされるのは本当に申し訳ない。

「……朝日の浴衣姿が見られると思って楽しみにしてたんだけど」

「申し訳ありません。」

あと、あいにく私、浴衣は持っていないのでそもそも浴衣姿をお見せすることは……」

できませんでした、と慰めにもならないと思うけど、何とかフォローを続けようとする。

「せっかく朝日のためにもすてきな浴衣を用意してたのに……」

えっ!?

僕のために、わざわざ浴衣を!?

「あ、あの！それは本当に申し訳ありません。事前にお伝えできなかった私の責任です……」

「あ、ううん、責めてるわけじゃないの。朝日がルナのためを思って屋敷に残りたい気持ちもちやんとわかってるし、ルナのことを気に掛けていてくれるのはあの娘の友達としてすごくうれしいことだから。」

ありがとう。……でも、ただね、ちよつと残念だったなって」

「瑞穂様……こちらこそありがとうございます。それと本当に申し訳ありません」

瑞穂様は本当に良い人だ。僕の自分勝手を知った上でそれを許してくれるどころか感謝までしてくれる。

そんな彼女に僕は誠意を持って心からの礼をした。

「もう、いいのに。……でも、朝日がそこまで気にするのだったら、せめて用意した浴衣を着るだけでいいから見せてくれない？」

「浴衣ですか……」

がっかりさせちゃった分、瑞穂様には喜んでいただきたい。水着と違って浴衣なら露出は少ないし、身体のラインが出ちゃうのが難点だけど、たぶん問題ないはずだ。

あと、瑞穂様のセンスで選んでいただいた浴衣というのにもとても興味があるし。

「はい、こちらこそ是非。瑞穂様を選んでくださったという浴衣、すごく楽しみです」

「やった！　じゃあ、さっそく私の部屋に行きましょう」

さっきまで暗い表情だった瑞穂様の顔がぱあ、笑顔になった。

よかった、僕の浴衣姿なんかで明るくなってもらえるなら、いくらだっておやすいご用だ。お優しい瑞穂様にはいつも笑顔でいて欲しい。

先に歩きだした彼女を追って、僕も彼女の部屋がある2階への階段を上った。

(BGM…ハイスサエティ斜陽組)

瑞穂様のお部屋に入るのって何だかすごく久しぶりな気がする。

そんな何気ない事を考えながら、彼女の部屋へやってきてみたら。

「じゃあ、朝日、服を脱いで。私が着付けてあげる」

「ええっ……！」

瑞穂様から、まさかの無茶振りだった。瑞穂様の性格を考えたらあつてしかるべき展開だったけど……。

「私、自分で着付けできますから！」

「朝日が何でもそつなくこなしてしまうのは知ってる。でも、和服に関しては私も得意分野だから」

確かに、ふつうだったら瑞穂様に着付けを手伝ってもらえるなんて嬉しい限りなんだろうけど。ふつうだったら。

でも僕、男だしなあ。

「あの！　私、自分の身体に自信なくて、他人に見られるのが苦手で！」

「そんなことないと思う！」

「はい。そんなことはありません」

一瞬、瑞穂様が怖いくらいの勢いで迫るものだから、思わず同意してしまった。うう。

「大丈夫。朝日はスタイルもよくて、お肌もすべすべで、本当に綺麗

だから。自信を持っていいと思う」

どうしよう、今日の瑞穂様、中々引いてくれない。もしかして、実は僕が花火に同行しないことを怒ってるんじゃないだろうか。

「あの、瑞穂様」

「大丈夫。大丈夫。怖いのは最初だけだから」

何がっ！？

というか、何ですか、さっきからわしわしさせてるその手！ それで何をどうなさるおつもりですか！？

とにかく、何とか逃げないと。

そう思っただアの方へちらりと視線を向けたものの……。

北斗さん！？ いつのまに！？

瑞穂様の付き人の北斗さんがドアを塞ぐようにして立っている。一見何も身構えてないようだけれど、あれは明らかに僕が逃げ出そうとしたら羽交い締めにして逃がさなくする感じだ。

万事休す、か。

……いや、駄目だ。こんなところでくじけるわけにはいけない。僕だけじゃなく、瑞穂様のためにも。

男嫌いの瑞穂様に僕が男だなんてこんな状況でバレてしまったら卒倒じゃすまない。

他に出口は……窓しかない。ちょうど手前のベッドにはおそらく瑞穂様が僕のために用意してくれたという浴衣がある。

あれを持って窓から飛び降りて自分の部屋に向かい、カギを掛けて着替える。一度着替えてしまえば瑞穂様にもあきらめてもらえるだろう。

だけど……ここ2階なんだよね……。うまく飛び降りれば怪我だけはないと思うけど……ちよつと勇気がいるなあ。

「ほら、朝日」

でも、瑞穂様のこの笑顔を守るためだ。

そうやって僕が覚悟を決めた——そのときだった。

(BGM…あまりに乙女的なサロン)

「瑞穂。用意していただいたユタカをサーシャに着付けてもらったんですけど、どこか変な気がします。ちよつと見ていただけませんか？」

ドアをノックして入ってきたのは、ユルシュール様だった。

助かったー。ここは何かユルシュール様に味方に付いてもらって切り抜けよう。

飛び降りるのもやぶさかじゃないけど、もし怪我なんてしてしまつたら、衣装制作にも支障が出てしまう。それは避けたい。

ユルシュール様、普段から自身を天使のようだととえられていますが、確かに今の僕にとってあなたは救済の天使です。特にその大きなフリルであしらわれた……て、えっ？ フリル？ あれ、でもさっ

き浴衣って……。

「あら、朝日もいたんですの？ あなたも瑞穂にユタカを用意してもらってましたの？」

「ユルシュール様」

「何ですの？」

「あの、まず、日本語間違ってます。ユタカではなく浴衣です」

「ですの？」

「それと……」

僕がどう言ったらいいものか悩んでいたら、それを不審に思ったのか、ユルシュール様は部屋の中を一別し、ある一点で視線を止めた。ベッドの上に広げられた僕の浴衣だ。

それを見つめて彼女は一度だけその大きな瞳をぱちくりとさせて、

「……あの、瑞穂。つかぬ事をお聞きしたいのですけど。どうしてそのユカタの裾はそんなに長いんですの？」

逆です。ユルシュール様の浴衣の丈が短すぎるんです。明らかに制服のスカートよりも短いです。

「それはね、朝日があまり人前で肌を出したくないって言うから」

瑞穂様！？ 確かにさっきそう言いましたけども！

「あら、そうでしたの。でも、朝日、あなただって十分綺麗な脚をしてるじゃありませんの。隠すなんてもったいないですわ」

ユルシュール様も、そんな慈しむような目をこつちを見ながら納得

しちやいけません！

「ですけど……では、なぜ朝日のユカタには私のもののようなフリルがついていませんか？」

いや、ですからふつうの浴衣にフリルなんて付いていません。そろそろ現実に目を向けてください。

「ユーシエ！」

「はいっ？」

「その浴衣すごく似合ってる！ すごくかわいいと思う」

瑞穂様……完全にこり押しですね。赤ずきんの狼だってもう少しちゃんと受け答えますよ。

「あら、そんなにまっすぐに誉められると、私も照れてしまいますわ。

オホホホホ」

ユルシュール様……。

「うん、そういうコスプレ衣装、中々着こなせる人いないから。ユーシエに着てもらってほんとに良かった」

瑞穂様、もう、コスプレ衣装って言っちゃってます……。

(BGM…サイレント)

「え？」

どうやら、ユルシュール様もその一言で気がついたらしい。

(BGM…ハイソサエティ斜陽組)

「……あの、瑞穂。この服は日本の伝統的な着物であるユタカでよろしいんですね？」

「うん。日本の伝統的なコスプレ浴衣よ」

「……………」

「瑞穂ー。用意してもらった浴衣を七愛に着付けてもらったんだけど見てもらっていいかな、て、ユーシェ何そのカッコ？ スゲーちょーミニ。……なんかのコスプレ？」

そしてそこへタイミング悪くやってきた湊（ふつうの浴衣着用）の一言でユルシュール様が沸点に達した。

「騙しやがりましたわー……っ！」

(BGM…ルナティックピープル)

その騒ぎに乗じて僕は浴衣を回収、無事瑞穂様の部屋からの脱出に成功した。

ありがとうございます、ユルシュール様。あなたの羞恥、無駄にはしません。

羞恥一つを共にして。

(BGM…あまりに乙女的なサロン)

数十分後。自分の部屋で着替えを終えた僕は再び瑞穂様のお部屋を訪れた。

「朝日ー！ かわいいっ！ すごく似合ってる、ハアハア」

さっき逃げ出したのを怒られるかと思っただけ、杞憂だったみたいだ。瑞穂様はすごく満悦で、興奮しすぎて少し息が荒いくらい。

「ありがとうございます。それと先ほどは申し訳ありませんでした」

「ううん、いいの。私こそごめんなさい。朝日が嫌がっているのに調子に乗りすぎちゃったみたい」

「気にしないでください」

お互いにごめんなさいしあつたら、何だか自然と笑みがこぼれた。なんか良いな、こういうの。

「最初はね、さっきユーシェの着ていた衣装を朝日に着てもらおうと思っていたの」

「えっ！？」

「でもね、やっぱり朝日にはまず正当派の浴衣かなって。でも、それで正解だった。朝日はすらっと背が高くてスタイルもいいから和服がすごく似合う」

「あ、ありがとうございます」

よかった、和服が似合う感じで。下手するとさっきの衣装は僕が着るハメになっていたのかと思うと、ぞっとしない。僕に瑞穂様のお願いを断りきる自信はないし。

「でもせっかく用意した衣装を着てもらわないのももったいないし、スタイルのいいユーシェに渡したの。ユーシェならきつと着こなしてくれると信じてた」

ユルシュール様……その時点ですでに僕の身代わりになってくれていたんですね。今度機会があれば、何かお礼しなくちゃいけない。スイスに行く以外の何かで。

「では、私は衣装製作があるのでそろそろ失礼しますね。浴衣は一度部屋に戻って、着替えてからまたお返しに参ります」

「着替えちゃダメ」

「えっ」

笑顔で着替えを封じられてしまった。

「あの、なぜでしょうか？」

「かわいいから」

即答だった。

「せっかく似合ってるのに着替えるなんて勿体ない。今日一日はその格好で過ごしてね」

「えっと、でも、私これから色々仕事があって、もし汚したりすると大変ですし」

あと、絶対変な目で見られるし、そもそも、この格好動きづらくて、作業には全然向いていない。

「朝日なら、多少汚してしまっても大丈夫。それに、はい」

そういつて後ろ手から差し出されたのは、白いエプロン。フリル付きの。

「あの、これ？」

「ユーシェの浴衣のオプション。これを付けければ汚さなくてすむですよ」

「……………」

笑顔の瑞穂様を前にして僕に断れるはずもなく。僕は今日一日を浴衣エプロンで過ごすハメになった。

僕自身の事情もあるから全部というわけにもいかないけれど、かいつまんで今朝の出来事を僕はルナ様にお話した。

そして僕が説明を終えると、ルナ様はふっと息を一つついた。

「そんな理由があつたのなら、早く言ってくれないと困るじゃないか。私はてつきり……」

「てつきり、何ですか？」

う、なんか怒ってる。ルナ様の目が心なしかジト目になってる。

「てつきり、君が実は花火を見に行きたかったのに、私が残るように言いつけたから、その腹いせに着ているものとはかり思っていた」

「滅相もないです！」

僕は大げさなくらい大きく両手を振って否定した。

「本当か？ さつきも花火の音を気にしたり、こっそり窓と外の様子を覗がったりしていたじゃないか」

「あれは……」

言葉に詰まる。あれはルナ様の心中を思っていたからなのだけど、それを言うわけにもいかない。

僕が黙っていると、ルナ様はそれをどう見なしたのか僕に向けていた視線を外した。

「GWのとき君は私に何か負い目を感じていただろ。このあいだはそもそもプールという場所に行きたがっていないようだった」

あれ？

「だが今日に限ってはそのいずれもないみたいだし。どうやら私はたわいもないやりとりを大切な約束だと一人勝手に勘違いしてただけのようだな」

口調はからかっているようみただけだ。

ルナ様……。もしかして。

「拗ねちゃってます？」

「何だと？ 私のどこをどう見たらそう見えるんだ。そもそも何に對して拗ねているだなんて……」

「私のことで不安になっておいでだったのですか？」

「違う、不安になんてこれっぽっちもなっていない」

「私が皆と出かけたかったんじゃないかと、気を回さしてしまったのですね？」

ルナ様にそっぽ向かれてしまった。でも、その態度はもうほとんど認めてるようなものだと思います。

「嬉しく思います」

「違うと言ってるだろ」

「私もルナ様と同じ思いでした」

「なに？」

僕が自分の思いを言い渋っていたせいで、主人に不安な思いをさせてしまっていた。でも、僕の主人は素直じゃないけどちゃんと正直に

自分の気持ちを表に出してくれた。だから僕もちゃんと言わないと。

「私はルナ様にお側に残して欲しいとお願いしました。それは私がルナ様に寂しい思いをしてほしくないと思ったからで、私の我儘です。

もちろんルナ様はお強い方なので、私の思いは単なる杞憂にすぎないと思います。ですがもし、ほんの少しでもお寂しい気持ちがあつたとして、それが私が側にいるだけで紛らわせることが本当にできているのだろうか、と」

僕は自分の不安を口にした。

「君というやつは……馬鹿だろ」

「えっ」

「何を考えているのかと思えば、やっぱりまたそんないらぬ気遣いを。まあ私は寂しいだなんて少しも思っていないのだから君の言うとおりそれは杞憂にすぎないんだが。お祭り騒ぎなんてこちらから願い下げだしな。

だがまあ、一応だ。一応。そんなことでいちいち不安になってくれる君へのサービスだ」

「サービスですか？」

そう言つてルナ様は目を伏せて、小さな声で言った。

「……君が側に居るのに寂しいなんて思うわけないじゃないか」

「ルナ様……」

「私もいまルナ様のお側に置いていたただけのことを何よりも幸せ

に思います」

「君は……！ またそういうことをスラスラと」

ルナ様のいつもの雪のように白い肌が紅潮してほんのりピンクに染まっている。

よっぽど恥ずかしかったんだろう。でも、そのよっぽどのことを口にくれたことが僕にはすごく嬉しかった。

「ルナ様。嬉しいです」

「落ち着け、朝日。それと泣くな」

「泣きません」

こんなに心が躍ってるのに、涙なんて出るはずがない。

「むしろ踊りたいところです」

「踊るな」

はあ、とため息をついたルナ様はまだ少し頬が赤いもののいつもの冷静さを取り戻していた。

「朝日」

「はい」

僕の返事にルナ様がジトつとした目を向けてくる。

「紅茶のお代わりをたのむ。話していたらのどが渴いた」

「かしこまりました」

「ゆっくり、用意してこい。ゆっくりでいいから、焦るな」

それは恥ずかしさを紛らわせるための時間稼ぎか何かでしょうか？

「それと」

「はい？」

リビングを出ようとした僕にルナ様が後ろから声をかけた。

「紅茶は二人分頼む」

「それは――」

「衣装製作も順調だし、今日は君も私もよく頑張った。だから時間的に余裕がある。」

「だから……もう少し君とおしゃべりをしていたい」

「……はい！」

お互いの不安が晴れたから、これで心おきなく今を楽しみたいと思える。花火の音はまだまだ聞こえ続けているけど、あの音が止むまで僕は二人きりだ。どんなおしゃべりをしよう。

すごくわくわくしてきた。

結局ユルシュール様が着るハメになった浴衣の話しようか。それともあのコスプレ浴衣を最終的に誰が着たかの話をしようかな？

今日は色々あったから、話したいこともいっぱいある。

そのためにとびきりの紅茶を用意しよう。

お茶菓子は何か良いかな？ クッキーかな？ ルナ様のお好きなピエラナイのマカロンはあったかな？

遠く花火の音が聞こえる廊下をキッチンに向けて僕はウキウキと歩きたした。